

# 虚の符

洪水企画 2016.12.31

18

イカダ

http://www.kozui.net



かれが希薄になった。とたん、つぶやきを、目にしたような、あるいは、なき声にふれたような。あつてもみない、いなくてもある。月は東に、そんな、りょういきで、これやこの、たばねて、くらさへ、寝物語だ。

なくような、もじをひろう。そうして、ふくろのように、わたしへ、すこすつ、あつめていたのだろうか。もはや、ひとごとめいた、しずかなぎわい。ぬくもりを枕に、さげびにも、擬音にもならない、かそけき、あかるさ。かれらはなきものたち、うしなつた声、はぐくむために、たとえば背景を、襪帳のように、おりあげていたのだと思う。ふくろのうちがわであつたかもしれないが、こうちくされた時点で、べつ、ひとの、世界のともる。

ないものたちで、みちでゆく。どこか、あまやかで、とてもなく、つれない。かれらがつむぐ、かれをききとる。わたしは、しずかに、たぐつていればよかつた。それが、声のやりとり、さきめく蜜月であつただろう。

まなうらを、寝息があつた。めざめが、それでも、かんじられたので、もしたちは、いきているのだ。たまたま、れつづけた記述、いた、あえない、いないからこそ、かれをあまえる。襪帳によりかかつたら、きえますか。わたしを希薄になつた。ふくろがあらへ、それでは、もじが、ひろえないではないか。さきやきにまぎれて、なき声の、しじまよ。みえないまま、けつして、うつろではなかつて、りょういきをこえ、のしかかるから。

声をみるように。だから、もじはなくならないのだ。たくさんすきて、ざわざわと、ふかまるきれつ。とぎしていたのは、どちらでしたか。ああ、ききたい。なら、起きるため、寝息をつめよう。かれを枕に、日は西に。

## 出口 坂多瑩子

都会の駅は、ちよつとした迷路になつているので、それと慣れない駅だと、外の空気が吸えると、ほつとするが、そんなとにかぎつて、駅隣りの、便所ここ、みたいな、こぼんだ場所にあられる小さな駅がある。オーバークォートの人が多いから、ここは冬のだろう、駅構内は、案内ひろく、さつきようやく外に出られたのに、また舞い戻つた気分だが、靴がすべる、足先がすつかり濡れてしまつて、寒い。

はやくおうちに、いそいで階段をのぼる、出口が、またわからなくなつて、ショーウィンドウをみると、夏服で、あひやなあたしがいるじやないか、おまけに、むきだしの腕まで伸びてきて、さつきと、消えちまえ

## 風見鶏 二条千河

かつてこの界限が街の中心だつたころ、あの館にもまだ人が住んでいて、赤いトンガリ屋根の頂には、それはそれは立派な鶏が留まつていた。毎朝、海から吹き寄せる風に、豪奢な尾羽根をたなびかせ、真紅の鶏冠を誇らしげに震わせながら、街中の鶏に先駆けて時をつくつた山の上の空へ向かつて、高らかに、館の主は著名な画家だつたらしい。彼の描く風景画には、いつも決まつて鶏の姿があつた。飾られた家に幸運をもたらすといつて、貴族やら豪商やらが競つて買い求める。その額縁の中でも鶏は時をつくつた油絵の具の空へ向かつて、高らかに、ときどき、鶏はくるりと身を翻し、海原へ向かつて啼くこともあつたが、飛べない鳥の一時の気まぐれと、画家は高をくつていたのだろう。カンバスに描かれた嘴は、いつも変わらずに山の方向を指していた。

(風向きが変わつたことを、わたしは何度も大声で告げたのに、あなたは顧みようとしなかつた！)

ある朝、山から吹き下ろす風に、翼を広げて二、三度大きく羽ばたくと、鶏はそのまゝ振り返ることなく、海の彼方へ飛び去つていつた。と同時に画家の描いた鶏たちもかき消えて、その後、絵は一枚も売れなかつたそうだが、近ごろは鶏を飼う家も見かけなくなつた。街外れに打ち捨てられた廃屋の傾きかけたトンガリ屋根の頂を、風はどちら向きに吹いているのか、もはや知るすべもなく、朝を告げるものもない。

## オフィス 平井達也

\*クリアホルダー\*  
A4クリアホルダーに書類を挟み込む関係法令集のコピーだとか、マトリクス分析図の案だとか、固めのものを押し込まれると、クリアホルダーは喜ぶ。

平積みすると取捨がつかなくなるので、ブックエンドを使って縦置きにする。急ぎの案件はピンクのホルダー。太ったピンクは大儀そうに隣のホワイトに寄り掛かりっぱなし。クリアホルダーなしでは仕事にならない。だからクリアホルダーは威張つている。帰宅時には鍵付きロッカーに取める。こつちは夕食もまだなのに、クリアホルダーの方はもう眠つている。

\*複合機\*

四つの能力を正確に駆使するうちで一番優秀だから、誰も表立って文句は言えない。「裏表の使い分けがうまいよな」「取引先の複合機と通じてるんだ」「陰ではいろいろ言われているが、命じた仕事は黙々とこなす。こつちのミスでも何も言わない。そこが可愛げがない。リース契約だから忠誠心もありはしない。いつだって移籍できると思つている。

でもすぐに時代についていけない。そのことには気づいていない。朝は起こしてやらないと仕事を始めない。そのくせ放つておくとスリープしだす。とはいえ嫌いにはなりきれない。

## {風になびく黄色の菜の花をペンチで……}

### たなかあきみつ

風になびく黄色の菜の花をペンチで筆写している。いきなり猫背の背面からそれとも薄曇りの肩越しに、連続的にシャッター音がする。カシヤカシヤ相次ぐ玉突きのような「眼珠」が、空中をぶらぶら浮遊する。これも色の祝祭。連写に賭ける切れ長の眼珠たちのminneにつき、暗箱の巻き舌に巻き込んで菜の花に描き込む。微風でも無風も同然に空中に佇む滞留する。風圧によじれる菜の花を灰色のグラフィイトで象る。ぐんぐん黄色になびく斜線を五線譜上で傾聴せよ。それもこれもすてきな屋上レギュラリテのしわざ。花びらの形状が風の便りに歪んだ、これはしきりに空間のパレットからはみだす黄色の眩暈の研鑽につき、菜の花は時限爆弾さながらの桜花ほどは散り急がない、その無音の在りようのコントラスト刃は思わずのけ反り、空中で各停止線を死守してたとえ散歩中であれ、桜花の滞空時間はパラドックスの毛足より長いだろう。

地面すすれに花びらが紋白蝶のようにとまると、色彩的に意外とピンクグリーンが底堅いと判明する、一八八九年作のムンク画《春》の半透明のカートンごしの日射しの物影にすがつて落花するや《声》画は、地面に風のアドレッセンスを鈍めるのに対し、桜花忌はもはや花びらの原形をとどめず茶色の粉末を呈する。

(空無の膨大なstetsonにおけるようにたとえれば、数本のネギの端本に暗紫色のテープが巻きつき、その直下には銀色の籠で塗り固めた長方体を、踏きこす赤土色の大なり小なり文字たち、猫の叫びの自重が全身6kgならば重すぎるか、猫年齢相応の老身か?―つるんと小耳に滑り込んだ)

すつかり耳が削ぎ落とされた叫びの現場の地肌を、ましてやその粒子を焙りだすように拡大すればするほど《叫び》という名の地表の黄土色や赤土色の周縁は、ブランクのブラックの空中プランコの真骨頂、G系灰色が、火葬人がブリキ箸でつまんだ下顎の原形を保持している、これはアンフォルムムの地肌深く貫入する。



## étude 四肆舞 84/105/113/123 池田 康

(84) 眼を病んで、眼珠が暗闇を見たがるようになった。暗闇なんか見てどうする、なんにもないじやないか。眼の痛みは時空の痛み、暗闇はそれをなでさする。暗闇の時間は単位を欠いた、行方不明の時間。暗闇の海に眼珠が漂う、なんも見えないことが有難く、どこに行くのだろうと不安になるが、暗闇にそこもどこもないのだ。おそろく、眼を病んで、眼珠がどこかへ行つてしまった。眼高のさびしい港を、黒い波が洗っている。

(105) カートンに裸を包んで、外を眺める。風が吹いている。誰もいない。宙空のドアは世界につながり、世界は裸で寝転がっている。今日はなんの日のなか、知らないがおそろく、裸になる日。風が近づいている。道のがびている。木がそよいでいる。雲間から目が射す。なにかが近づいてくる。叫び声がかきこえる。叫び声はいつも裸。世界は叫びとして、白刃でやつてくる。

## (113) アタタカイオノミモノイカガデスカ

近づくか自販機が誘う、かあいい女の子の声で、アタタカイオノミモノイカガデスカ、なにを貰おうか妄想する。人工の少女の声の缶、振らずにお飲み下さい。かあいい女の子は自販機に囚われている。ぼくは救出する。百円玉と五十円玉を投入して、かあいい女の子を救出する。ああわが妄想、かあいい女の子はいなかった。ブラックは苦い。シユガー抜ききの真夜は苦い。

(123) ぼくの耳に入ろうとする虻よ、君はまちがっている。満月の夜にふる雨と同じくらい、不謹慎なまでにまちがっている。虻よ、世界は自由と考える。君のまちがいをはくは正しい。しかし君は飛んでいってしまう。もういない。ふとどきの遊子よ、大満月の夜にふる雨と同じくらい、ひどいまちがいは世界にあふれている。このぼくが生まれてきたことも、その一つかもしれない。

## 祝福の日 小島きみ子



山は金色にこんもりふくらんでいました。まるで祝福の日のスフレケーキのように、葬儀センターから霊柩車、従弟とわたしとが乗り身内の車があとに続きました。道順は行きと帰りは異なつたものにするのが慣わしです。落葉松が黄葉して、今年もこの山の黄葉を見ることになると思ひなかつたのでした。

棺の頭部のあたりと椅子が一つあつて、わたしはそこに遺影を持つて座りました。旧道を通り、叔父夫婦が新婚生活を送つた町を通り、叔父が生まれた実家へと走らせ、大叔父が番頭をしていた造り酒屋の前でも車を止めました。あとは茶毘にふす火葬場まで一直線です。

日は明るいのには狐の嫁入りのような雨粒が当ります。都市計画で整備された町並みを抜けて、一気に火葬場へ駆け上がっていきます。手馴れた人たちが車を迎え、ドアを開き、最後のお別れをして、遺体を置く石の台は熱く焼けていて、合掌礼拝をするくらぐらと目が回ります。人間の最後の熱が満ちていて、よろけそうです。すつかり釜のふたが閉められて、長い線香を焚いて、一時間半控え室で待ちます。熱燗を飲み干して線香を絶やさないように焚きに行きます。きよは、叔母の一周忌でもありました。仲の良い夫婦とはそのようなものなのでしょう。叔父は妻に導かれて、落葉松の林を越えて、幼いときにくれた長男と遊園地のメリーゴーラウンドで遊んでいるのでしょうか。

叔父は美しい背になって従弟の胸に抱かれて、葬儀センターに戻りました。きよの祝福の計画は、まだ独身の従弟が叔母と二歳で亡くなった長男の法事も、きよやろうと決めていたことでした。きよやろうなら、おじさん、娘のように思つていてくれてありがとう。(みんなで)いつかまたあの遊園地で会おうね。



## もしそうなら、虻よ

君がぼくを攻撃するのは正しい。満月の夜にふる雨はぼくを濡らさばくはまちがつた月を夢想する。